総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル
第７号

CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts Education
7th issue

オーストラリア　行く？語学研修＋森に生きる報告

いつになく寒かった今年の冬。そんな極寒のなか、９人の学生が真夏のオーストラリアに向けて関西国際空港を旅立った。出発は２月 14 日。オーストラリアのブリスベン国際空港に着いたのが翌 15 日。そこは、真夏の世界、２週間の研修が始まる。ところが語学研修を行う第１週は雨がち。金曜日にはとうとうサイクロン（台風）が･･･しかも 910hPa の猛烈なものが直撃するとの予報。ただ、ブリスベンに近づくにつれて急速に勢力が弱まってくれたのはラッキーだった。そしてさらにラッキーなことに森に入る２週目は晴天続きだった。（２ページに続く）

カンニングのすゝめ（笑）

と、これはもちろん冗談です。いやしくも学生たるもの、清く正しくかつ勤勉に授業を受け試験に臨まなければなりません。それが当たり前のことです。

にもかかわらず、表題のような不謹慎な言葉をタイトルにして（たとえ「ゆるキャラ」が売り物の CRADLE 誌上にであれ）短文を書こうと思い立ったには、それなりのわけがあります。（８ページに続く）

ワシントンＤＣという街について

「文化資源」の側面を中心に

2015 年２月、「政府情報アクセス」にかかわる調査のため、4 年半ぶりに米国ワシントン DC を訪れた。筆者は研究活動の過程でさまざまな国・地域を訪れてきたが、ワシントン DC は個人的に最も親しみのある街のひとつと言ってよい。最初の訪問は 1998 年のことで、修士論文の仕上げの調査や先輩の研究の補助のために、ここでの連邦政府機関や大学図書館を訪れた。その後の留学（ニューヨーク州北中部のシラキュース大学）の際にも、サマースクール（夏季集中講義）や、国立公文書館記録管理庁（NARA）でのインターンシップのために、ワシントン DC での滞在期間が長かった。（６ページに続く）

絵と本文は関係ありません。

オーストラリア研修スケジュール

2月14日　関西国際空港出発（台北経由）
語学研修週
15日 ブリスベン国際空港到着、学生はホストファミリー宅へ
16日 グリフィス大学語学研修開始（クラス分け試験＋授業）
（～20日授業：午前8時30分～12時30分　午後1時30分～3時30分

21日　学生はホストファミリーからホテルに移動
「森に生きる」週
22日　天理教オセアニア出張所訪問
23日　South D'Aguilar 国立公園にてツタ類の除去作業
24日　オーストラリア固有動物に関する研修
25日　South D'Aguilar 国立公園内にてユーカリを植林
26日　South D'Aguilar 国立公園内にて外来植物（ランタナ等）の除去作業
27日　天理教オセアニア出張所でひのきしん（外来植物の除去作業）
28日　フリータイム（ゴールドコースト訪問）
3月1日　ブリスベン国際空港出発(台北経由)
2日　関西国際空港到着
（合計17日間）

参加学生一覧（学年は当時）

小田 一樹	国際文化学部アジア学科韓国・朝鮮語コース	4年
田中 悠平	国際学部外国語学科英米語専攻	4年
須藤 有紗	国際学部外国語学科英米語専攻	4年
黒木 俊輔	体育学部健康コース	4年
中田 研介	体育学部健康コース	4年
菅野 紗矢香	人間学部人間関係学科生涯教育専攻	3年
中　裕生	国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカコース	2年
吉谷 祐貴	国際学部地域文化学科アメリカスコース	2年
安田 慎司	体育学部教育コース	2年
		（合計9名）

学生の感想にみるオーストラリアの２週間

ホームステ先イで感じた人のやさしさ

小田一樹

私は今回のオーストラリア研修が人生で初めての海外で、英語も全くできないので２月 14 日までずっと不安でした。しかし、ブリスベンに着いてホームステイ先の家族と会って話してみるととても気さくでいい人たちだったので不安が消えました。（中略）お母さんは毎食ご飯を作ってくれて、私が「good!」と言うとうれしそうに「good!」と返してくれました。晩御飯の時、私にいつもビールをくれました。晩御飯のかたづけが終わると皆でテレビを見ていました。ほとんど何を言っているのかわかりませんでしたが、皆で見るオーストラリアのテレビはとても楽しかったです（**小田一樹**）。

ホームステイ先には中国からの留学生が２人おり、お互い英語を学んでいる身だったので初めは挨拶のみの会話などでしたが、食事の際ホストマザーなどと一緒にみんなで話

須藤有紗

すうちに徐々に打ち解けることができました。ホストマザーとは夜景を見に行ったり、カラオケをしたりしてフリータイムを楽しみ、留学生の子たちとは放課後にブリスベンの市街の方へ遊びに行きショッピングをしたり観覧車に乗ったりして過ごしました。ホストファミリーと過ごした 1 週間はあっという間でした（**須藤有紗**）。

最も気を使ったのが、「水」の使用に関することでした。シャワーを出すのは 4 分までと言われた時は驚きました。また、電気に関しても使わないなら切ることをよく注意されました。そこで、私は日本でどれだけのエネルギーを使って生活してきたのかを実感しました。（中略）大学とホームステイ先との往復で一番驚いたことが、周りのフレンドリーさでした。一度も話したことがないのに、数回同じバスで見た人が話しかけてくれたり、知らない近所の人が「おはよう」と手を振ってくれたりしてくれました。その部分に戸惑いながらも、日本にはない親密さに居心地の良さを感じました（**菅野紗矢香**）。

菅野 紗矢香

学校がある日はバス停までホストマザーが送ってくれたことだけでも親切にされているなと思いでいっぱいであったが、雨の中バス停に向かう見知らぬ人に声をかけ、一緒の車に乗せていくという出来事もあった。自分が親切にされたわけではないが、あったかい気持ちになれる出来事であったし、このことからも、オーストラリアは、人がいいと思えたと同時に、日本ではなかなかできないことだとも思い日本と海外の違いを感じた（**中田研介**）。

田中悠平

天理大学の他の学生のホームステイ先がたまたま徒歩 15 分ほどの近辺にあったので、そこに遊びに行って全く違った雰囲気を味わう事が出来、本当に様々な人種、習慣、考え方があるんだなと、日本にいる時とは全く懸け離れた感覚を知ることが出来ました。（中略）ホストファミリーとのお別れの前夜にはディナーにメキシコ料理の店へ連れて行ってもらいました。どれも最高の料理ばかりで、様々な国のビールも飲む事が出来ました（**田中悠平**）。

大学の授業は楽しい♪

グリフィス大学での語学学習ではたくさんの友達ができました。私のクラスには中国人、ベトナム人、台湾人と様々な国の人がいましたがコミュニケーションをとることができる授業の内容が多かったのですぐに打ち解けることができ、楽しく英語を学ぶことができました。（中略）一日 6 時間英語を勉強しましたがしんどいという思いは一切なく、楽しく英語を学ぶことができ大変充実した学習内容となりました。（中略）コミュニケーションを多くとる授業内容だったので楽しくて、今まで以上に英語を勉強するのが好きになりました。また機会があればぜひグリフィス大学で勉強したいと思いました（**黒木俊輔**）。

黒木俊輔

現地の大学の先生や職員の方々は笑顔で接してくれ、私の言葉の拙さもやさしく受け止めてくれました。言葉の壁はジェスチャーや単語の強調をしてくれ、逆に私が何かを伝えるためには、自身の感情表現を手振りや表情、単語で伝えなければならなかったため、恥ずかしがっている暇などありませんでした（**菅野紗矢香**）。

授業はただ教科書と向き合うだけでなく、グループになってクイズをしたり、発表会のようなものも行 い、とても楽しい授業でした（例えば、その日のトピックが festival で、文章問題とリスニングを解いた後にグループになり、オリジナルの festival 広告を作 って発表するなど）。そこで気づいたのは、単語は知ってるのにその使い方が分からないということでした。だから日本人って英語しゃべれないんですね（**中裕生**）。

オーストラリアという外の国を見ることで、日本という内を知ることができた。例えば、グリフィス大学に通っているとき、授業の始業時間までに教室にいるのは日本人だけであったこと、遅れて教室に入っても先生は”来てくれてありがとう“という言葉をかけてくれること。このことは普段から時間前に集まって、遅れると申し訳ない気持ちになる私たち日本人にとって少し違和感があった（**中田研介**）。

共同生活をしながら「森に生きる」

残りの１週間は研修メンバーでホテルに泊まり、晩御飯はみんなで作って食べました。初日にお味噌汁を食べた時は感動しました、日本の味だ、と。この１週間は本当に楽しい毎日でした。天理教オセアニア出張所の子どもたちと遊んだり、森に行って外来植物の駆除をしたり、みんなとどこかへ出かけたりなど、とても充実していました（**安田慎司**）。

オーストラリアの森にある外来種の駆除などを行いました。ランタナという外来植物がたくさん生えていて、オーストラリアそのものの自然の風景が失われるので駆除をする必要があるそうです。（中略）

また森での植樹を行いました。そこでは、ユーカリの苗木や芝のような植物を植えました。いつか僕らの植えた木が成長して大きくなるのを見てみたいと思いました（**吉谷祐貴**）。

周りを素晴らしい自然に囲まれていたので、日本では見ることのない大きなトカゲなどを見ることもありました。私たちができたのはほんとにわずかな限られたことでしたが、少しでも為になっていたらいいなと思います（**須藤有紗**）。

森での作業は自分が想像してたよりは軽作業で、地道にコツコツと根気よく、時には会話をしながら楽しく作業が出来ました。外来植物の急成長を食い止めるため、駆除をして行く事が主な内容でした。外来植物は小さくて可愛い花が咲いているものの、茎には無数の棘があり素手では触れないような物ばかりで、とてもややこしい特徴をもった

植物でした。ゆっくりと過ごす時はゆっくりと、キビキビ働く時はキビキビ働くという感じで過ごしました（**田中悠平**）。

森の奥に入っていくこともあり、道のりはガタガタの道が多く、レンジャーの方の慣れた様子とは裏腹に、私はふらふらになってしまうこともありました。また、動物や虫、爬虫類は大きさが大きく、驚きました（**菅野紗矢香**）。

レンジャーとの外来種の駆除では、私たち約 10 人の手伝いで何がどう変わるのかという思いでいたが、レンジャーのとても助かった、ありがとうという言葉で、少しだけ力になれたかなと思えた（**中田研介**）。

みんなでご飯を作ったり、楽しく話をしながらご飯を食べたりして楽しかったし、日に日に仲良くなっていったのでホテルでの生活もどんどん楽しいものになっていきました。みんなで買い物に行って、みんなでご飯をつくって、みんなで食べるという体験をすることが久しぶりだったので私自身うれしい気持ちでいっぱいでした（**黒木俊輔**）。

全体の感想

お金も安くはありませんし、二週間海外でいるという事も不安だったのですが最高のメンバーと仲良くなれ、最高のホームステイ先のファミリーに会えたので、いまでは行ってよかったと本当に思います（**小田一樹**）。

仕事をした後のバーベキューは、この上なく最高でした。みんなと出掛けたのはコアラサンクチュアリー、スカイウォーク、ゴールドコースト、ワインを試飲できるところ、です。一番心に残っているのはやはりゴールドコーストです。買い物もしたし海にも入ったし、ほんとに夏を満喫しました（**安田慎司**）。

海外へ行く明確な目的(語学・異文化勉強等)がある方や、一人で行動し、旅したい方などにはオススメ出来ません。しかし経験は積めるので行って損することはありません。どの学部の方でも海外は行ってほしいです　（**中裕生**）。

初めは参加しようか迷っていましたが、思いきって参加して良かったと思いました。こういったことに参加するのは経験を積むという意味で、自分の人生にとって、とても大きな糧になると思います（**吉谷祐貴**）。

（**構成　総合教育研究センター　伊藤義之**）

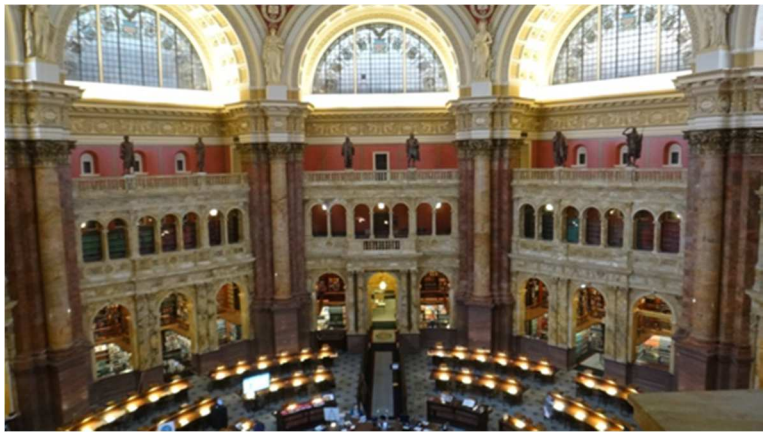
オーストラリア短期研修は今年度も２月半ばに２週間の予定で行います。

ワシントンＤＣという街について（１ページからの続き）

最初の訪問から 20 年近くになるが、さまざまな改築・土地開発や、「9.11 後」のセキュリティ強化など変化の面はあるものの、街の基本的性質や「街並みの骨格」は変わっていないと、今回の訪問で改めて感じた。それは、「米国政治の中枢」という点はもちろんであるが、何よりも「米国における文化資源の収集・展示・公開の中心地」ということである。すなわち、図書館、文書館、博物館、美術館が街の中心にそろい、そこに収蔵されたさまざまな「文化資源」―図書、文書、絵画・芸術作品、「モノ」資料など―を米国民および世界中の人々に向けて展示・公開する、という役割を、ワシントン DC は担っている、ということである。本稿ではアトランダムに、そのいくつかを紹介したい。

議会図書館（Library of Congress: LC）

図書館司書課程の授業では紹介の機会も多いと思うが、世界最大の図書館と称され、日本の国立国会図書館のモデルになったとも言われる機関である。今回の訪問ではちょうど「オープンハウス」（一般公開）の日が設定され、通常は登録利用者しか利用できない「ジェファーソン館」の閲覧室が開放されたほか、LC における資料の保存・修復活動や「資料の電子化」などの取り組みが説明された。また展示も充実しており、中でもコメディアンとして活躍したボブ・ホープを記念するエリアでは、20 世紀から現在に至るまでの「米国での政治的風刺」がさまざまな形で示され、厚みある米国文化の一端に触れることができた。



議会図書館・ジェファーソン館閲覧室

国立公文書館記録管理庁（NARA）

ここは歴史的公文書の保存・公開にとどまらず、連邦政府の公文書管理にも携わっているため、こうした名称をとっているが、中心となるのはワシントン DC の本館（Archives という地下鉄駅もある）と、その郊外（メリーランド州）にある新館である（ほかに全米各地に分館をもつ）。本館ではここ最近になり展示室（Museum）の整備を進めており、常設展示としては「自由憲章展示室（独立宣言・合衆国憲法・権利章典の原本を展示）」、「国民の保管庫（The Public Vault）」という多様な文書・映像・写真等の展示室、「権利の記録（Records of Rights）」という米国建国期から 20 世紀の公民権・女性の権利などにかかわる文書・記録の展示室の 3 つが存在する（ほかに特別展示室あり）。映画上映会などのイベントも多く、2015 年のアカデミー長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した、エドワード・スノーデンによる米国政府の情報収集活動の告発をテーマにした「Citizenfour」もここで上映された（これを国立公文書館として上映したことに、同館の懐の大きさが感じられないだろうか）。

NARA 本館

スミソニアン国立アメリカ歴史博物館

スミソニアン協会と言えば、上記のようなワシントン DC での「文化資源」活動の中心であり、航空宇宙博物館（郊外のダレス空港そばの新館での展示が進む）が広く知られているが、ほかにさまざまな美術館や、アメリカ・インディアン博物館（アフリカン・アメリカン博物館は 2016 年開館予定）など、数多くの博物館・美術館を運営しており、しかもすべてが入館無料である。その中で、米国の歴史を通じて文化を知る手がかりになるのが、この歴史博物館であ

る。もっとも、建国当時の米国国旗の原物の展示を含め、「国立という位置づけのもとでの、良くも悪くもひとつの規範的な米国史の展示」という印象も抱いてしまう。それが最もよく現れているのが「自由の代償：戦争に臨むアメリカ人（The Price of Freedom: Americans at War）」というエリアである。ここでは「米国と世界の自由を求めるために戦争を『代償』とする」という米国の姿勢が示されており、例えば「真珠湾攻撃」や、それに先立つ「三国同盟」、また原爆投下についても米国の立場での展示・解説が成されている（日系人抑留に関する展示もあるが）。

スミソニアン国立アメリカ歴史博物館

ニュージアム（Newseum）

上記の歴史博物館（また NARA の展示も含め）と比較しつつ観て欲しいのがこの博物館である。ニュージアムというのは「ニュースやジャーナリズムに関する博物館」を意味する造語で、米国合衆国憲法第 1 修正に示された「言論と報道の自由（つまり政府を批判する自由）」を体現するというのがこの博物館の位置づけである。米国や世界の報道活動の成果がこの博物館で展示されており、戦争の犠牲になったジャーナリストのリストや、東日本大震災に関する報道についても、ここで掲げられている（もっとも筆者は今回の滞在では訪問できなかった）。映像の展示も多く、時間をとって鑑賞することが望ましい。

以上はごく限られた例だが、ほかにもホロコースト博物館や国際スパイ博物館など、他に例をみない展示を行っている博物館も、ワシントン DC には多く存在する。

ニュージアム（これのみ 2009 年 10 月撮影）

これ以外にも、リンカーンら政治家の記念館、記念碑、慰霊碑（戦没者の名前が並ぶ「ベトナム戦争戦没者慰霊碑」が有名）など、「文化資源」や「記憶」に関する施設が、この街に集積している。「このような展示や説明でよいのか」ということを頭に入れながら、米国文化の厚み、また米国としての「記録と文化と記憶の残し方」を体感するのが、ワシントン DC という街を探索するひとつの醍醐味と言えるだろう。

なお、ワシントン DC 訪問に際しては、『地球の歩き方』のワシントン DC 編が何より重要な情報源と言える（できるだけ最新のものを参照するのが望ましい）。また一歩進んでこの街のことを知るには、若干古くなったが、赤木昭夫『ワシントン DC・ガイドブック』（岩波書店、2004）が参考になる（もっとも街の「地政的位置づけ」の解説が中心であり、史蹟や店の紹介といった一般的な「ガイドブック」ではない）。もうひとつ、根本彰教授（筆者の指導教官である）による『場所としての図書館・空間としての図書館』（学文社、2015）も、ワシントン DC に加えヨーロッパ各地の図書館などの模様を、多数の写真をまじえ紹介しているので、一読をすすめたい。

（総合教育研究センター　古賀 崇）

CRADLE（クレードル）　第 7 号　2015 年 5 月発行

発行者　伊藤義之　天理大学　人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　電話・FAX　0743-63-7092（内線）6111

印　刷　株式会社　春日

カンニングのすゝめ（笑）（１ページからの続き）

先日のこと昼食をとりながら同僚と話をしたその話題にさかのぼります。それは、定期試験での不正行為の摘発が最近減ったことに関するものでした。同僚の指摘でなるほどと思ったのですが、そう言えば 10 年以上前に比べて最近は期末試験での不正行為の事例が少ない。なんでだろう、そういう話題でした。

同僚はそれなりの「原因分析」をしているようでしたし、私も、まあそういうことかなと聞いていたのですが、そのことがきっかけで、「不正行為摘発の減少」なる現代的（！）事象について少し考えさせられることになったのです。

一般論として、犯罪（カンニングを「犯罪」とまで言い切るのは少し気が引けますが）の検挙・摘発の減少の原因として、とりあえず三つのことが考えられます。一つは、刑事警察が「ゆるく」なったこと（試験に置き直せば、試験監督の眼が甘くなったこと）。二つ目は、刑事警察が「厳しく」なったこと（これら二つは正反対のように見えて同一の結果をもたらします。前者では、犯罪が増加したにもかかわらず、当局がそれを取り締まろうとしないので検挙数が減る、後者では、犯罪者が萎縮して犯罪そのものが減る結果検挙数が減る・・・という具合）です。三つ目は、あまりありそうにないことですが、人々のモラルと言うか、遵法精神が向上して犯罪が減るケースです。

ところで、本学での（おそらく本学に限ったことではないのでしょうが）試験での不正行為摘発数の減少の原因はどうでしょうか。先の同僚は別の考えをもっているようでしたが、私自身の印象としては、私は本学在職 30 年を超えますが、上記の三つに関して、本学に特に顕著な変化は生じていないように思います。まあ、多少の変化はあるかも知れませんが。

さて、上記の三つのどれにも当てはまらないとしたら・・・私は、ここである恐るべき連想にとらわれてしまいました。

私の学生時代に、シニカルな（皮肉な）言動で知られる政治学教授がいました。私はその教授のファンで、ゼミにも参加しましたが。さて、その教授が、そのゼミで言ったか、どこかの文章で書いたか忘れましたが、次のような台詞を発したことがあります。「カンニングがあるからこそ試験制度は成り立っているのだ」。私は、これを読んだか聴いたかしたときは何かいやな気分がしました。まるで不正行為を「必要悪」のように捉える態度に少し腹が立ったのを覚えています。

ただ、この教授の言いたいことは概ね理解できました。要するに、たとえばの話、私有財産制度があるから「窃盗」という犯罪があるので、逆に言えば、「窃盗」があるということは（ありすぎるとまた困りますが）私有財産制度が健在であることの証だということです。政治学では、こういうことを「制度への表敬」という言葉で表現します。悪いことをすることは悪い。しかし、やむにやまれず人の物を盗るというのは、まず物欲があるということ、それから、「人の物は人の物」という前提で「申し訳ないけど失敬する」という心理というか態度があるということです。

このことを学校の試験に置き換えてみましょう。カンニングは悪い。しかし、単位は欲しい。さらに欲を言えばいい成績が欲しい。そこで、他人の答案を横目で見るなどということをする。まずそこには、試験というものに対する「表敬」（大げさですが「敬意」）がある。にもかかわらず、と言うか、であるからこそ、カンニングをする。

ところが、いまもし、試験やら単位やらなんかどうでもいいや、つまり試験制度への「表敬」がなくなってしまったら・・・おそらくカンニングというものに対する「意欲」（？）も同時になくなっていくでしょう。最近の本学における試験における不正行為摘発の減少の主原因がもしこれであるとしたら・・・ここで、私は上に述べたシニカル教授の言葉がようやく実感となって伝わってきました。試験制度というものに対する「表敬」の消滅（携帯なら、ここでムンクの「叫び」の絵文字を入れたいところです）！それは、大学という制度への「表敬」の消滅と同じことではないのか。もしそうだとしたら・・・実際、笑いごとではないのです。

天理大学の学生諸君。もし、君たちが小田健君の授業を登録したら、授業中爆睡してもかまわない。許す。そのかわり、「一夜漬け」でも「泥縄」でも何でもいいから、少しは試験勉強をしてくれ。そして、試験当日、あくまでも自分一人の力で、少しでもたくさん文章を書いてくれ。それが、まわりまわって、本学の将来、いや何よりも君たち自身の将来、つまり「生き馬の目をぬく」世間を渡っていく訓練になる。

実のところ、この文章、表題は「カンニングのすゝめ」となっていますが、言いたいことは、かの福沢諭吉大先生の『学問のすゝめ』と同じことなのです、まことに畏れおおいことですが。学生諸君、どうかこの短文の筆者の意をくんで勉学にいそしんでください。おしまい。　**（総合教育研究センター　小田 健）**